

コロナ禍後の「ニューノーマル」といわれる時代。アーティストたちはアーツサポート関西(ASK)の支援を受けて、さまざまな活動に果敢に取り組みはじめています。

## ASKが支援する活動のご紹介

### クラウドファンディング▶伝統芸能

#### 100年以上にわたり非公開であった「杉江能楽堂」を体験するプロジェクト

建立から100年以上にわたり非公開であった岸和田市にある杉江能楽堂。邸宅の一部としてしつらえられた国内でも数少ない半屋外の構造を持つ能楽堂で、昨年、国の登録有形文化財に登録されました。2月19日～26日にかけて、この能楽堂の魅力や歴史を多くの方に知ってもらい、次の100年に向けて継承していこうと、「杉江能楽堂体験プロジェクト」が行われました。能楽師の林本大さんによる「能楽のナナフシギ」、上方舞の山村友五郎さんと落語家・桂吉坊さんによる「杉江能楽堂で上方芸能を楽しむ～上方舞×上方落語の共演」、裏千家・松井宗豊さんによる「杉江能楽堂で『お茶』を楽しむワーク

ショップ」、能楽師和泉流狂言方・小笠原由詞さんらによる「すぎえ狂言会『盆山・蝸牛』」の4つのプログラムが実施され、多くの方が参加しました。この活動に対してASKのクラウドファンディングで寄付が集められ、集まった寄付から142万円が助成金として交付されました。



『能楽のナナフシギ』会場風景  
能楽師・林本大 場所：杉江能楽堂

### 未来アート寄金助成▶コンテンポラリーダンス

#### コンテンポラリーダンス・プロジェクト「移動する暮らし」

コンテンポラリーダンサーの内田結花さんが中根千枝さんとデュオで取り組むダンス作品「移動する暮らし」が、せんだいメディアテーク(仙台市)と神戸市長田区の漁港周辺を舞台にそれぞれ昨年6月と今年の2月に上演されました。「移動する暮らし」は、二人が数年かけて取り組んでいる作品で、劇場を飛び出して商店街など人々の生活の場に介入しながら演じられるもの。二人が踊るダンスは周囲の環境に作用し、また環境から影響を受けながら、移動し流転する「身体」のあり方や、場所に根差した「暮らす」ことの意味を浮かび上がらせていきます。2月に行われた神戸の公演では、

劇場から始まったダンスが、中断をはさんで場所を漁港に移して続き、最後は、観客の一人ひとりが劇場で渡された小石を海に向かって解き放ち、観客自身も作品の一部となって、意識の解放を体験しました。



『移動する暮らし』パフォーマンス風景  
内田結花・中根千枝 場所：神戸市長田港付近 撮影：阪下混成

### 一般公募助成▶美術

#### 西條茜さんが個展「Phantom Body」を開催しました

既存の陶芸の概念にとらわれず、作品に関わる場所の歴史や社会的な文脈、あるいは陶芸の内部と外部の関係性などを斬新な切り口で表現し、大きな注目を集めるアーティストの西條茜さん。昨年、大阪のアートコートギャラリーで、「身体性」をテーマに個展「Phantom

Body」を開催しました。この展覧会にむけて滋賀県立陶芸の森に滞在して数点の大型作品を制作。アーツサポート関西はその制作費の一部を助成しました。展覧会では数名のダンサーが作品を抱擁したり、口づけをしたりするなどのパフォーマンスを行い、身体との対比によって、通常の陶器の用途を超えた重量感のある存在物として作品が際立って感じられました。こうした活動が高く評価され、西條さんは、丸亀市立猪熊弦一郎現代美術館が昨年新たに設けた、優れた現代美術アーティストに贈られる第1回MIMOCA EYE大賞を受賞しました。



『Phantom Body』展覧会風景  
場所：アートコートギャラリー  
撮影：来田猛

### 一般公募助成▶美術

#### 金サジさんによる写真集「物語」が出版されました

アーティストの金サジさんは、自身も在日韓国人であり、分断され矛盾をはらんだ自分のアイデンティティーの問題をはじめ、男女の性差、西洋美術史に向き合う現代美術の眼差しなど、複雑に錯綜し絡み合うさまざまな現代の様相を、「物語」という視点で浮き彫りにする写真作品を手がけています。作品は映画のロケさながらに、キャストやロケ地、舞台美術、衣装、メイク、照明に至るまで入念に時間をかけて作り込まれており、昨年、2018年から手掛けてきた一連の作品を、写真集「物語」として写真専門の出版会社赤々舎より出版され話題となりました。アーツサポート関西は、2018年

～2019年、2021年～2022年にかけて金さんを支援し、写真集の制作にも大きく貢献しています。アイデンティティーの揺らぎや葛藤、世界を根底から覆すような疫病や戦争に際し、私たちはどのように生きていくのか。金サジさんの作品は、そうした問いを私たちに投げかけるものであるように思います。



写真集『物語』より「永遠に歩く人々」(赤々舎 2022年)

一般公募助成 ▶ 音楽

## 現代音楽家集団ロゼッタの公演「エンカウンター」が開催されました

クラシックギター奏者であり、また現代音楽の作曲家でもある橋爪皓佐さんが主宰する現代音楽家集団ロゼッタ。ロゼッタでは毎年、特定のテーマの下で優れた現代音楽作品を募集する国際作曲公募を行っています。昨年は、コロナ禍の経験から演奏者が揃わなくとも成立する「分割可能性」というテーマで公募を実施。海外を中心に38作品の応募がありました。ロゼッタは、その中から5作品を選び、今年3月25日、ロームシアター京都で開催されたコンサート「エンカウンター」で演奏しました。演奏会では、曲と曲の合間にラジオ番組調の軽いノリによる曲解説を行う演出を施し、難解といわれる現代音楽を聴くことのハードルを下げる工夫なども行いました。そうした試みが奏功し、演奏された現代音楽作

品は、日常と非日常の双方の世界を適度な緊張感で繋ぐような、新たな関係性を生み出しているように感じました。



『エンカウンター』公演より 場所：ロームシアター京都

## 第9回 上方落語若手噺家グランプリ2023決勝戦 (2023年6月20日／天満天神繁昌亭)

アーツサポート関西「寺田千代乃上方落語若手噺家支援寄金」助成

◆主催：公益財団法人 上方落語協会

### 桂そうばさんがグランプリを獲得

上方落語の若手噺家の登竜門として知られる「上方落語若手噺家グランプリ」。アート引越センター現名誉会長の寺田千代乃氏が2015年に設けたファンドをもとにスタートし、今年で第9回を迎えました。グランプリには入門4年～18年目までの若手噺家36名が参加。6月20日に行われた決勝戦には、予選を勝ち抜いた9名が出場し、各自珠玉の持ちネタを披露して会場を大いに沸かせました。熱戦の結果、見事グランプリには、やっかいな酔っ払いが飲み屋の主人にからむ「上爛屋」を演じた桂そうばさんが輝き、準グランプリは芝居ものを得意とする桂染吉さんが「権助芝居」で受賞。参加資格の最後の年での受賞となったそうばさんは「関西は賞が少なく東京の同世代に受賞歴で負けていましたが、これで挽回できました」とグランプリ受賞の喜びを語っていました。



左から上方落語協会会長・笑福亭仁智さん、グランプリ受賞の桂そうばさん、準グランプリ受賞の桂染吉さん、アート引越センター名誉会長の寺田千代乃氏 2023年6月20日・授賞式にて 場所：天満天神繁昌亭



## 若いクラシック音楽家を支援する助成制度 「トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成」が始まります！

アーツサポート関西に、この度、関西で活動する若手クラシック音楽家の支援を目的とした新しい助成制度「トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成」が誕生し、この7月から今年度後半に行われる音楽活動を対象にした助成金の申請の受付を行いました。

この新しい助成金は、音楽大学を優秀な成績で卒業したものの演奏の機会に恵まれない若い音楽家たちを応援しようと、トヨタモビリティ新大阪株式会社からいただいた寄付を原資に設けられたものです。

トヨタモビリティ新大阪株式会社は、明治時代より100年にわたり、大阪南部の和泉市で紡績業を営んでいた久保惣を源流とする会社で、久保惣は大阪府和泉市に寄贈された国宝や重要文化財を含む「久保惣コレクション」でも広く知られています。現在、そのコレクションは和泉市立久保惣美術館に収められ、訪れた多くの人々に親しまれています。

この度新たに誕生した「トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成」には、《プログラム1》「自主企画によるアウトリーチ・コンサート支援」と《プログラム2》「室内楽のマスタークラス等を行う活動支援」の2つのプログラムがあります。《プログラム1》は、地域のコミュニティやクラシック音楽に触れる機会の少ない方々に音楽を届けるなどのアウトリーチ活動を支援するもので、そうした活動が音楽家たちの学びにつながればという期待も込められています。また《プログラム2》は、音大などで学ぶ機会が減ったといわれる室内楽の重要性に光を当てようとするもので、それにより関西のクラシック音楽界の水準の向上を目指します。

今後、さらにこの取り組みの幅を広げて行くことを予定しており、現在、新しいスキームの導入に向けた準備を進めています。